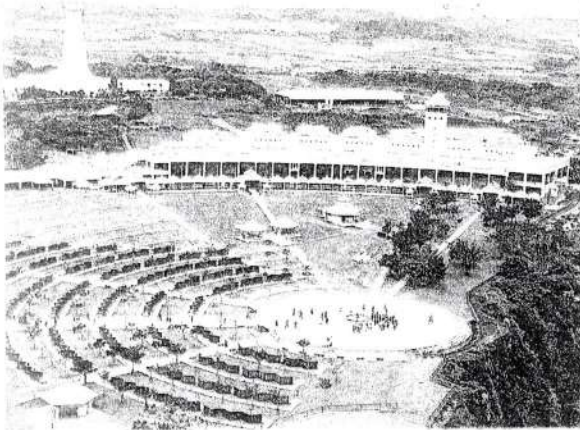


文化

沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

石原 昌家



平和祈念資料館と平和の礎

前回紹介した中国の「平すか?」と通訳を介して質問した。その答えは「学校で事前学習をしっかりとやって来ているので大丈夫です」ということだった。

沖縄戦での全戦没者の名前を石板に刻銘した「平和の礎」も、まったく戦争を知らない世代に、「ありのままの戦場」を想像させることによって、個人差はあるが、

(61)

つても戦争を強く拒絶し、戦争のない平和な社会をめざす心を養っていかねばならないかと想定していた。

未来志向への批判

「平和の礎」に刻銘されているのは、沖縄出身者ばかりで、他府県人、アメリカ人、イギリス人、朝鮮・韓国人、台湾人の名前である。これらの名前をみれば、世の世の併設された資料館の解説文で戦争が起

平和の礎③

共生の価値観提示

「恩讐を越え」に強い反発も

た経緯を知り、この地で戦死した理由を理解し、戦争を理性的に認識できるであろうと予測していた。

未来志向への批判

私は前例のない歴史的な事業である「平和の礎」創設にかかわることになったとき、とりわけ将来世代の学生たちと密に議論があった。したがって、いま連戦中の「平和の礎」については学生たちの伸びやかな原書が多く反映されている。

若者たちと交わした「平和の礎」を生かす未来志向に激しく拒絶反応をあらわされたのが、以下のNHK教育テレビの海外ドキュメンタリー番組の内容に影

る。しかしながら、その未来志向の考えも一部から非難・批判されることになった。

本来なら、日本でもそのような精神的苦痛を克服しながらの対話であることはテレビ画面を通して伝わってきた。

「平和の礎」は、日本軍と死闘を繰り返したアメリカ軍のバックナー中将最高指揮官が戦死し、その娘が「平和の礎」を訪れていた。刻銘版裏下の地面にそっと置いた花かごに、長いリボンをつけ父の刻銘位置まで、リボンを引っ張り、父の名前の前にガムテープで

「平和の礎」は、沖縄の「ぬちとう宝(命こそ宝)」と「共生」の思想から生まれたものであり、21世紀へむけて、戦争体験継承の新しい発想・方法が構築されていく大きなきっかけになるものである。人類が滅亡の淵に立たされている核時代であればこそ、思想信条を異にした人たちが共生・共存できるような普遍的な新しい平和思想、新しい価値観を国際社会に提示していくものと位置づけることができる。以上が、将来世代の学生たちが議論しあい共通認識した内容であり、それを除幕前に表明してあった。(今回は「平和の礎」除幕後について述べていく)

た経緯を知り、この地で戦死した理由を理解し、戦争を理性的に認識できるであろうと予測していた。

私は前例のない歴史的な事業である「平和の礎」創設にかかわることになったとき、とりわけ将来世代の学生たちと密に議論があった。したがって、いま連戦中の「平和の礎」については学生たちの伸びやかな原書が多く反映されている。

「平和の礎」は、日本軍と死闘を繰り返したアメリカ軍のバックナー中将最高指揮官が戦死し、その娘が「平和の礎」を訪れていた。刻銘版裏下の地面にそっと置いた花かごに、長いリボンをつけ父の刻銘位置まで、リボンを引っ張り、父の名前の前にガムテープで

「平和の礎」は、沖縄の「ぬちとう宝(命こそ宝)」と「共生」の思想から生まれたものであり、21世紀へむけて、戦争体験継承の新しい発想・方法が構築されていく大きなきっかけになるものである。人類が滅亡の淵に立たされている核時代であればこそ、思想信条を異にした人たちが共生・共存できるような普遍的な新しい平和思想、新しい価値観を国際社会に提示していくものと位置づけることができる。以上が、将来世代の学生たちが議論しあい共通認識した内容であり、それを除幕前に表明してあった。(今回は「平和の礎」除幕後について述べていく)

「平和の礎」は、沖縄の「ぬちとう宝(命こそ宝)」と「共生」の思想から生まれたものであり、21世紀へむけて、戦争体験継承の新しい発想・方法が構築されていく大きなきっかけになるものである。人類が滅亡の淵に立たされている核時代であればこそ、思想信条を異にした人たちが共生・共存できるような普遍的な新しい平和思想、新しい価値観を国際社会に提示していくものと位置づけることができる。以上が、将来世代の学生たちが議論しあい共通認識した内容であり、それを除幕前に表明してあった。(今回は「平和の礎」除幕後について述べていく)

(今回は6月30日掲載)